



校長室だより 21号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【9月月間目標】 『健康管理を徹底しよう!』

【来週の行事】 9月6日(月)～10(金) 全商英語課外
7日(火)・8日(水) 振徳祭文化の部

- 1 「振徳随想」 第3代校長 河野 傳 20周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話 「四肢切断」 『致知』2003年1月号より抜粋

「振徳随想」(原文) 第3代校長 河野 傳

私が日南振徳商業高校に在任したのは昭51.4～55.3までの4年間であった。その最後の年に創立10周年を迎え55年2月に記念式典を実施した。それから早や10年が過ぎ今年20周年を迎えると聞き慶賀にたえないと共に時の早さを強く感じる次第である。20年は成人の年に当り今までの歴史の上に立って更に力強い大きな一歩が踏み出されることであろう。高校生急増期の最後の新設校として昭和45年創立され県内で始めて小学科制度がとられ商業・情報処理・営業の3学科が設置された。情報処理科は本県特に情報処理教育のさきがけとして商業教育の先端的役割を果たしたもので誠に有意義なものであった。日南振徳商業高校という校名も旧飫肥藩の藩校振徳堂にゆかりの名称であり語呂もよく、又、地名の他に地域の歴史を表す校名は公立高校としては全国でも珍しい数少ない学校の一つであろう。既設の日南商業(現日南学園)とのかかわりもあったのであろうが。県外での校長会等でよく私立校と間違われ校名由来の説明も度々であった。

51年4月学校に足を踏み入れた時から学校全体に漲る活気を全身に感じとり身の引きしめる思いがした。

新設校として職員、生徒の一体となった学行一如の情熱のかもしれない出すエネルギーであったろう。特に生徒指導面でしつけ教育就中(なかんずく)あいさつ指導が徹底し職員生徒の間で朝から元気のよいコミュニケーションが交わされていた。これは父母、地域社会、就職先企業の間でも高い評価をうけ学校を指定しての求人もある程であった。ここまで指導された先生方に厚く敬意を表したい。

全校生徒540の小規模校ながら部活動推進を目標に掲げ全校的取り組みで各種大会に輝かしい成績を収めていた。特に体育部では陸上、文化部では珠算が際立っていた。陸上部は長嶺先生の指導のもと少数精鋭ですばらしい記録を残し、県下高校総体では連続優勝、全国総体でもトラック優勝、総合三位、又個人優勝、上位入賞等正に陸上振徳の黄金時代であった。宮崎の「振徳」から全国の「振徳」への華々しいデビューであった。全国会場できく「日南振徳」の入賞アナウンスは目頭が熱くなるような感激を覚え言葉が詰ったことを今も忘れることが出来ない。あの選手達は今どうし

ているだろうか。 珠算部も富家、上田先生が中心となって練習を重ね県大会ではいつも上位入賞を果し、全国大会にも参加していた。その他の部においてもほとんど全生徒が部活動に参加してきびしい練習に打ち込み全校的な熱気を感じることができた。このような部活動の進展は単に部活動のみに留らず学習活動、生活指導にも大きな力を発揮したものと確信しておる次第である。

創立20周年という大きな節目を迎え国際化、情報化、サービス経済化の大きなうねりの中で21世紀へ向けての商業教育の発展に全校挙げて取りくみ前進されることを切に期待したいものである。

出逢ったいい話 『四肢切断 中村久子の生涯が教えるもの』

今回は、両手両足の切断という重い障がいを抱えながらも、人生を力強く生き抜き、ヘレンケラーにも称賛された中村久子女史の次女・富子さんのお話です。

母の72年の生涯というのは、辛いことのほうが多かったと思うんですね。でも母はそれを語らずに、自分を取り巻いてくださったいい方がいろいろなことを教えてくださったと、人のご縁の大切さ、一期一会をすごく大事にしましたね。

だから母のいただいたご縁というものを一つひとつ振り返ってみると、本当にその一つひとつの出会いから、母はすごいものを与えていただいていたんですね。だからそれだけ母は幸せだったと思います。その中にはクリスチャンの人もいる、いろいろな宗教の方もいるけど、そういうものを全部含めて、一つのものになっているような気がするんですね。

母が子どもの時、一所懸命口で縫ったお人形の着物をお友達にあげたら、その子のお母さんに「こんな唾で濡れた着物なんか汚くて」って川へ捨てられて、ものすごくショックを受けたという話があるんです。

母は私に言ったんですが、あの時は、悔しいよりも、捨てられたことよりも、そんなものしか縫えない自分が情けなかった。それからまた一所懸命に練習をして、濡れないように縫えるようになるまで13年半かかったって言うんですよ。

私はその話を初めて叔母から聞いた時、母に「13年半もかかったの？」って言ったら、母が「そうよ、富子。濡れなくなるまでに、13年半かかっちゃった。フッ」って笑ったんですよ。

その時に母は私に言ったんです人間ていうものは、悲しいもんですって。その人の一言がなければ、母さんはいまだに濡れたまんまのお裁縫をしていたかもしれない。「濡れて汚い」と言われたので、なんとかして濡れないように縫いたいと思って、縫えるようになったんだから、感謝しなければいけないのに、なかなかその感謝ができない。言われたことを、自分は決して忘れられない。人間って悲しいものねって。

その人とはその後も何度も会って、向こうは自分の言ったことは完全に忘れていて、「富子ちゃんが大きくなりましたね。よかったですね、久さんは」なんて言ってくれる。でも自分の胸の内では、グーッと込み上げる悲しさがあるんですって。

そして私に言いましたよ。「富子は言葉が悪いから、人に言葉を掛ける時は気をつけなさいね」って。あなたが何気なく言ったことが、相手を傷つけて一生心に残ることもあるからって。